
【体験版】 人間国宝の刀鍛冶が元ヤンの弟子に鍛冶場で犯
されて声を殺せなくなるまで

— STORY —

三日間、鍛冶場の前に座り続ける男がいた。

ずぶ濡れの元暴走族。傷だらけの拳。少年院で湊の刀に出会い、血が沸騰したと言う。

孤高の刀鍛冶・湊と、元暴走族の岳。

折れない鋼と、それを打ち続ける炎の物語。

【 目 次 】

第1話 押しかけ弟子

第2話 鉄滓と椿油

1

第1話 押しかけ弟子

「邪魔だ。消えろ」

三日目の雨だった。

戸を開けたのは、こいつを追い払うためだ。それ以外の理由はない。

鍛冶場の前に座り続けている男がいる。

ずぶ濡れの短髪から雫があごの線を伝い、地面に落ちる。広い肩幅。傷だらけの拳を両ひざの上
に置いて、こっちを見上げている。

右眉を横切る古い傷。目つきは鋭い。元暴走族だろう。一目でわかる。

そういう人間は何人も見てきた。物珍しさで来て、三日で飽きる類だ。

「帰れ」

それだけ言って戸を閉めようとした。

「てめえの刀が俺を呼んだんだ」

足が止まった。

なぜ止まったのか、自分でもわからない。こんな台詞で止まるような人間ではないはずだ。

「あんたの地鉄、板目じゃねえだろ。柂目肌に杓目が混じってる。あの肌合いは折り返しの回数を普通より二回多くやってる。炭素の入り方が均一じゃねえのに、あえてそのムラを鍛え肌に残してる」

雨音の中で、男の声だけが妙にはっきり聞こえた。

正確だ。

鋼に触れたことのない人間の言葉ではない。どこでこれを。

「……本で読んだか」

「少年院の資料室だ。あんたが打った刀の写真集、あった」

男が立ち上がった。百八十六はある。俺よりずっと大きい。

だが、その目が。

刀の話をしている間だけ、鋭さが消えていた。子供みたいに丸くなっている。

俺と同じ目だ。

鋼を前にしたときの、あの目。

——駄目だ。

こういう目をした人間を、俺はどうしても突き放しきれない。

それは弱点だ。わかっている。わかっただけ、制御できない。

「帰れ」

もう一度言った。声が、さっきより力を欠いていることに自分で気づいた。

男が一步、鍛冶場の敷居をまたいだ。

「入るなと言った」

掴みかかった。胸ぐらを掴んで引き戻そうとした。

濡れた布越しに、厚い胸板の熱が手のひらに伝わった。

――重い。

腕を引こうとした瞬間、逆に手首を掴まれた。万力みたいな握力だった。

「放せ」

「先に掴んだのはあんただろ」

引き寄せられた。身体ごと。

足が滑り、背中が炉の側面にぶつかった。熱い。煉瓦の余熱が背中に食い込む。

男の体重が上からのしかかってきた。両手首を頭の上で片手で押さえつけられている。もう片方の手が、前掛けの紐にかかった。

「何をする」

「ずっと見てた。三日間」

紐が解かれていく。

前掛けが落ちた。鍛冶場の灯りが、晒された上半身を照らした。

男の目が変わった。丸い子供の目が、獣の目になっている。

「きれいな身体してんな、師匠」

血が、凍った。

「その言葉を使うな」

「何がそんなに気に入らねえんだよ。きれいなもんはきれいだろ」

頬を殴ろうとした。手首を押さえられていて届かない。

男が鼻で息を吐いた。嘲笑ではない。もっと厄介なもの――感嘆に近い何か。

「人間国宝がこんな顔すんだな」

前掛けの下は何もない。鍛冶場では上半身裸に前掛け一枚。それが当たり前だった。他人の目を意識したことなどなかった。

なのに今、この男の視線が肌を這うだけで――腹の底がざわつく。

人に触れられた記憶がない。

物心ついてから、誰かの手が自分の肌に触れた回数を数えられるほどしかない。祖父の拳。鋼造の手拭い越しの手当て。それ以外に、ない。

だから。

男の掌が胸に触れた瞬間、思考が白く飛んだ。

熱い。

人間の手は、こんなに熱いものだったか。鋼を握っている時とは違う。鋼は均一に冷たい。この手は部分ごとに温度が違う。指先と掌の付け根と、手首の内側と。全部違う熱が、俺の肌に触れている。

――鍛冶場の、隅に置いてあった椿油の瓶。あれは刀の手入れ用だ。

男の指が瓶を取り、蓋を開ける音が聞こえた。甘い油の匂いが立ち昇る。この匂いは鍛冶場の匂いだ。俺が毎日嗅いでいる匂いだ。それがこんな場面で――

「やめろ」

声が出た。自分でも驚くほど低い声だった。

男は答えない。

椿油を掌に垂らし、両手を擦り合わせ、そのまま俺の胸に手を置いた。油の温度。体温に温められた椿油が、鎖骨から胸へとゆっくり広がっていく。指が鎖骨のくぼみに沿って左右に滑り、肩から腕へと流れ、また胸の中央に戻ってくる。まるで刀身を磨くみたいに、丁寧に。

「っ――」

息が漏れた。

漏れただけだ。声ではない。

男の親指が胸の突起に触れた。鍛冶で焼けた浅黒い肌の上で、油に光る指が滑る。円を描くように擦られ、爪の先で引っかくように弾かれた。突起が硬くなっていく。自分の身体が自分の知らない反応をしている。

――火箸。

炉の横に掛けてある火箸を男がもう片方の手で取り上げた。冷えた鉄だ。使っていない火箸は室温まで冷えている。

「な――」

冷たい鉄の先端が、反対側の胸の突起に押し当てられた。

椿油で温められた片方と、冷えた鉄で挟まれた片方。温度差が脳を灼いた。温かい方が疼き、冷たい方が痛みに近い刺激を送ってくる。二つの感覚が背骨を通って下腹部に落ちていく。

身体が跳ねた。

跳ねるな。跳ねるな、この身体。

「反応してんのに強がんなよ」

男の声が耳元で鳴った。吐息の熱さで耳たぶが痺れる。

「哀れだぜ、師匠。人に触られたことねえだろ。身体が飢えてんじゃねえか」

歯を食いしばった。奥歯が軋む音が頭蓋に響く。

飢えてなどいない。人間は不純物だ。ずっとそう思って生きてきた。鋼以外のものに触れる必要はなかった。

火箸が胸から離れ、腹を滑り降りていった。冷えた鉄が臍の脇を撫で、下腹部の産毛の上をゆっくりと這う。鳥肌が波のように広がった。

同時に男のもう片方の手が椿油ごと腹を撫で下ろしてくる。油の温もりと火箸の冷たさが交互に肌を舐める。神経がどちらに集中すればいいのかわからず、全身が過敏になっていく。

――勃っている。

いつからだ。

掴みかかった時か。手首を押さえつけられた時か。胸に触れられた時か。わからない。気づいた時には、もう限界まで張り詰めていた。先端から透明な液が滲み出て、腹に糸を引いている。

男が火箸を置いた。代わりに、油で濡れた指が根元に触れた。

「こいつは正直だな」

嗤われた。男の指が根元から竿を辿り、先端に達した。先走りの液を親指で塗り広げるように亀頭を撫で回される。くるり、くるりと、先端の割れ目を親指の腹でいたぶられる。

「人間国宝様がこんなもんで立ってやがる」

もう片方の手が竿を握り、根元から先端まで一度だけゆっくりとしごき上げた。その遅さが、焦らしだと頭ではわかっている。わかっている、腰が勝手に前に出た。もっと速くと求めるように。

――違う。これは俺の意思じゃない。

殺したい。この男を殺したい。

なのに腰が、勝手に動こうとしている。身体が、もう一度触れろと叫んでいる。

「っ、あ――」

握り込まれた。根元を強く締め、先端に向かってしごき上げる。椿油と先走りの液が混ざり、ぬちゅ、ぬちゅと鍛冶場に音が響いた。

「声、出せよ」

「……出さない」

「じゃあ出るまでやるか」

速度が上がった。握りを浅くして亀頭だけを掌で包み、手首を回すように捻る。裏筋を親指の腹で擦り上げられるたびに、腹の底から熱が突き抜けた。尿道口の縁を爪の先でなぞられ、全身がびくりと痙攣した。

「ここか。ここ弱えんだな」

的確に同じ場所を攻められる。先端を弄ばれながら、もう片方の手が睾丸を包み込んだ。掌の中で転がすように揉まれ、下から持ち上げるように圧迫される。二箇所同時の刺激に視界が揺れた。

声を殺した。唇を噛んだ。血の味がする。

身体は裏切っている。先走りの液は止まらず、男の手の中でぬるぬると音を立てている。竿全体が脈打ち、触れられるたびに跳ねる。

だが声は、出さない。

男が手を止めた。

「……何する気だ」

「わかってんだろ」

椿油が指に垂らされる音。

腿を割られた。炉の余熱で火照った煉瓦の上で、足を開かされている。男の大きな手が太ももの内側を撫で上げ、会陰部を指の背で擦った。その一撫でだけで、腰が浮いた。

最初の本が入った時、身体中の筋肉が硬直した。異物だ。こんなもの、身体の中に入れていいはずがない。括約筋が締め付ける。押し返そうとする。

「力抜けって。鋼と同じだ。ガチガチじゃ折れんぞ」

知ったような口を。

だが――身体は、男の言葉に従った。呼吸が鍛冶の鞆のリズムになっている。吸って、長く吐く。無意識にそうしていた。

指が第二関節まで沈んだ。内壁が異物の形を覚えようとするように、ぎゅうと締まっては緩みを繰り返す。

二本目が加わった。

中で指が開かれ、押し広げられる感覚。痛みと、痛みの奥にある別の何か。指が奥を探るように曲がった。前立腺に触れた瞬間、視界に火花が散った。鍛冶の火花ではない。頭の中で弾けた白い光。

「――ッ」

腰が跳ねた。反射だ。制御できない。

「ここか」

的確に同じ場所を押される。指の腹でぐりぐりと円を描くように刺激され、下腹部に熱い塊が凝縮していく。何度も、何度も。指が押すたびに、先端から先走りが零れ落ちた。触れてもいないのに、勃起した竿がびくびくと跳ねている。

喉の奥から、声にならない音が漏れた。呼吸が崩れる。鞆のリズムが保てない。

「入れるぞ」

「――拒否する」

「身体は拒否してねえけど」

指が抜かれた。

ぬるり、と内壁が指を名残惜しむように締まる感触があった。自分の身体がそんな反応をしたことに、吐き気がするほどの怒りを覚えた。

もっと太い熱が押し当てられた。

先端が括約筋を押し開いていく。裂けるかと思った。裂けはしなかった。椿油のおかげだろう。憎い。自分の鍛冶場の油が、こんなことに使われている。

ずぶ、と音がした。

先端が入った瞬間、内壁が痙攣した。異物の太さに悲鳴を上げている。

男が腰を進める。じわじわと、奥へ。内壁が押し広げられていく。圧迫感。充満していく感覚。自分の中に他人の一部が入り込んでいく、その事実だけで意識が遠くなりそうだった。

根元まで入った時、男の腰骨が尻に当たった。密着している。男の腹筋が背中に触れる。汗の匂い。椿油の甘い匂い。炉の炭の匂い。全部が混ざって、鍛冶場の空気を別のものに変えている。

炉の熱が背中を焼く。男の胸板の熱が腹に伝わる。二つの熱源に挟まれて、自分の体温がどこからどこまでなのかわからなくなる。

中で脈打っている。男のものが。自分の鼓動と重なったり、ずれたりしている。こんなに深い場所で他人の体温を感じるのは、はじめてだ。はじめてに決まっている。こんなこと、誰ともしたことがない。

「……っ、は――」

動き出した。

引き抜かれる時、内壁が吸い付くように締まる。ずるり、と擦られる感覚が背骨を駆け上がった。そして、また深く押し込まれる。ぐぶ、と椿油が音を立てた。

前立腺をかすめた。

「あ――」

声が、出た。

出た。出てしまった。

俺の口から。この男の腰の動きに合わせて。

「いい声じゃねえか、師匠」

黙れ。黙れ。

男が角度を変えた。腰を据えて下から突き上げるように動く。その角度が、正確に前立腺を捉えた。一突きごとに快樂の波が脳まで貫く。ぐちゅ、ぐちゅ、と中で椿油が音を立てている。

声が止まらなかった。喉から押し出される。獣みたいな、自分の声だと信じたくない音。ああ、とか、ぐ、とか。言葉にもならない断片が、鍛冶場の天井に反響している。

この場所は俺の聖域だ。鋼と火と水だけの世界だった場所に、こんな音が満ちている。

「人間国宝がこんな声出すんだな。聞かせてやりてえな、あの審査員のジジイどもに」

怒りで視界が赤くなった。だがその怒りすら、腰を突き上げられる衝撃にかき消される。

男の手が腰を掴んでいる。大きな手だ。腰骨を覆うように指が食い込む。痣になるだろう。明日、この痣を見ながら鍛冶をしなければならない。

その思考が、屈辱で腹の奥を焼いた。

速度が上がった。ぱん、ぱん、と肌がぶつかる音が炉の爆ぜる音と重なる。先走りの液が腹に溜まり、動くたびに水音を立てている。勃起した竿が揺れ、その先端から透明な糸が途切れなく垂れ落ちていた。

――だが。

求める言葉だけは、絶対に出さない。

もっと、だとか。そこ、だとか。

声は出た。身体は裏切った。

けれど、自分から欲しがら言葉だけは。

男の呼吸が荒くなった。腰の動きが速くなり、リズムが崩れていく。突き上げる力が強まり、一突きごとに身体が持ち上がるほど。

「くそ――先に、いく――」

男が奥深くまで押し込んで、止まった。

中で脈打つ熱。一度、二度、三度、四度。内壁に直接叩きつけられるような射精の圧力。注ぎ込まれる量が、中を満たしていく。熱い。外から注がれる熱が、内壁を焼くように広がっていく。

男の腰が小さく震えていた。額から汗が落ちて、俺の腹に散った。

男が抜いた。ずるりと引き抜かれた瞬間、広げられていた内壁が急に空になる感覚。そして、ぬるい白濁が穴から溢れ出した。太ももの内側を伝い、煉瓦の床に落ちる。ぽた、ぽた、と。

俺はまだ勃っている。触れられていないのに、限界に近い。前立腺を突かれ続けた余韻が下腹部に溜まったまま、行き場を失っている。

男が手を伸ばした。

「触るな」

処理を拒否した。勃起したまま、男を睨んだ。

自分のものに自分で触れるのも、この男に触れさせるのも——全部、敗北だ。ここで果てることを許すわけにはいかない。

男が、目を見開いた。

何を見ている。俺の何を見ている。

「……すげえな、あんた」

その声は、嘲笑ではなかった。

だからこそ、許せなかった。

汚れた身体のまま立ち上がった。

足が震えていた。両手首に男の指の跡が赤く残っている。太ももの内側を白濁が伝う感触。まだ勃ったままの自分の身体。全部を無視して、箒を取った。

鍛冶場の床に散った炭の欠片を掃き始めた。掃くたびに、尻の奥から熱い液が零れ落ちるのがわかった。

それも無視した。

男がまだ立っている。

「明日来たら殺す」

男は何も言わなかった。

鍛冶場を出ていく足音。砂利を踏む音。遠ざかっていく。

一人になった鍛冶場で、鞆の音だけが残った。

俺の呼吸だ。まだ、鞆のリズムから戻れない。

箒を持つ手が震えている。

左手の甲の古い火傷の痕を、親指でなぞった。平面の端を確認する、いつもの癖。だが今は、何を確認しているのかわからない。

——あの男の目は、本物だった。

鋼を見るとき、あの目。

あれと同じ目で、俺を見ていた。

認めない。

あの目だけが本物であっても、あの男のしたことは——

認めない。永遠に。

岳は鍛冶場を出て、砂利道を歩いた。

雨はいつの間にか上がっていた。濡れた地面から湯気が立っている。

指の関節を鳴らした。ぱきぱきと、順番に。右手の親指から小指まで。

あの人は最後まで自分では果てなかった。

勃起したまま、俺を睨んでいた。折れなかった。身体がどれだけ反応しても、あの目だけは一ミリも屈服しなかった。

少年院の資料室で見た刀の写真。

刃文が月明かりに浮かび上がる一枚。あの時、身体中の血が沸騰した。

今も、同じだ。

あの人の前腕。鍛冶で鍛えられた、不釣り合いなほど太い前腕。汗が首筋を流れていく線。火傷の痕のある左手。

全部、刀だった。

あの人自身が、一振りの刀だった。

――明日来たら殺す。

後頭部をがしがしと搔いた。

唇の端が、勝手に持ち上がっている。

殺すと言った。

あの人があの目で、俺を見た。

殺すと言ったということは、俺の存在を認識したということだ。

三日間無視し続けたあの人が、初めて俺に言葉を向けた。

明日も行く。

殺されても行く。

2

第2話 鉄滓と椿油

「殺すつったよな、あんた」

翌朝、男はまた来た。

だが鍛冶場には入らなかった。

敷居の外、炭置き場の前に座り込んで、散らばった炭を大きさごとに並べ始めている。雨上がりの泥がひざを汚しているのも気にしない。ただ黙って、炭を整理している。

戸を開けて睨んだ。男は一瞬だけこちらを見て、すぐに炭に視線を戻した。

敷居を越えない。踏み込まない。

――学習したか。

戸を閉めた。

門は、かけなかった。なぜかけなかったのか。手が動かなかっただけだ。

三日が過ぎた。

男は毎朝来て、炭置き場を整頓し、日が暮れると帰った。鍛冶場に一步も入らなかった。

四日目の朝、炭置き場の炭が種類別、大きさ別に完璧に分類されていた。俺がやるより正確だった。

「炭を運びたいなら運べ。だが鍛冶場には入るな」

男が顔を上げた。あの丸い目。

何も言わなかった。ただ立ち上がって、炭を両腕に抱えた。

その日から、男が炭を運んだ。

俺は鍛冶場の中から、その音を聞いていた。炭がぶつかる乾いた音。砂利を踏む足音。規則的で、迷いがない。

五日目の昼。俺が炭を確認しに外へ出ると、男が手に取った炭をじっと見ていた。

「この炭、温度足りねえだろ」

足が止まった。

「焼き方が甘い。火に入れてもすぐ崩れる。灰が多くなって鋼の表面が荒れる」

正しい。

納入業者が質を落としてきた炭だ。俺が選別して弾こうとしていた分を、この男が先に見抜いた

。

何も言わずに鍛冶場に戻った。

戻ってから気づいた。足を止めていた。また、この男の言葉で。

隣の研ぎ場から、鋼造の声が聞こえた。

岳は湯呑みを両手で包んでいる。鋼造が茶を淹れたらしい。

鍛冶場の戸の隙間から、見ていた。見るつもりはなかった。声が聞こえただけだ。

「お前さん、刀のどこに惚れた」

鋼造の声は、いつもゆっくりだ。急がない。相手を急かさない。

「……少年院の資料室で、写真集見たんすよ」

岳が湯呑みの中身を見つめている。

「湊さんが打った刀。刃文が月明かりに浮かんでる写真。見た瞬間、身体中の血がぜんぶ沸いた。鉄を打って、こんなもんが生まれんのかって。こんなもんが、人間の手で作れんのかって」

――聞いていない。聞いていないことにする。

「俺はそれまで、何かがきれいだと思ったことがなかった。きれいなもんは自分とは関係ねえと思ってた。でもあの刀は違った。あの刀は俺に向かって光ってた」

鋼造が茶をすすった。

「……ほう」

あの男の声は震えていなかった。震えていないのに、その奥にある熱が鍛冶場の戸の隙間を通過して伝わってきた。

戸の隙間から手を離れた。

手近な平面の端を親指でなぞった。何を確認しているのか、自分でもわからない。

「触るな。見ろ」

鍛冶場の戸を開けて、男にそう言った。自分でも驚いた。口が勝手に動いた。

男が息を呑む音が聞こえた。敷居をまたいで、鍛冶場に入ってくる。

炉に火を入れた。鞆を踏み、炭を熾していく。温度が上がる。鋼を火床に置いた。

玉鋼が赤く染まっていく。桜色から橙、橙から白に近い黄色へ。

槌を振り上げた。打った。鋼が悲鳴のような音を立てる。打つ。打つ。打つ。

火花が散る。汗が額から落ちて、炉の煉瓦に蒸発する。

男は――動かなかった。

鍛冶場の隅で、石みたいに固まっていた。目が丸い。子供の目。あの日見たのと同じ目が、今度は炉の光を受けて濡れている。

――泣いているのか。

違う。目が潤んでいるだけだ。泣いてはいない。

確認するために見たのではない。視界の端に入っただけだ。

鋼を打ち続けた。三十分。一時間。二時間。

汗が全身を流れ、前掛けが湿り、呼吸が荒くなっても手は止めなかった。

鋼を水に入れた。じゅう、と蒸気が上がる。

その瞬間、背中に手が触れた。

「――触るなと言った」

振り返った。男がすぐ後ろにいた。

いつ近づいた。足音が聞こえなかった。鋼を打つ音で消されていた。

「でも見ただろ。俺がどうなってるか」

男の下半身が視界に入った。

ズボンの前が、はっきりと膨らんでいる。

「……お前は鍛冶を見て勃つのか」

「あんたを見て勃ってんだ」

掴みかかる暇もなかった。

腕を取られ、振り返らされた。背中から抱きすくめられる形。男の腕が太い。振りほどけない。

前回と同じだ。体格差は物理だ。覆せない。

男の手が鍛冶場の壁にかけてあった藁縄を取った。

「今度は逃がさねえ」

両手首を前で重ねられ、藁縄で縛り上げられた。きつい。藁の繊維が汗で湿った手首に食い込む。結び目は素人の結び方ではなかった。

「放せ。……放せ」

「断る」

前掛けを剥がされた。二回目だ。この男にこの鍛冶場で二回。

二時間鋼を打ち続けた後の身体は、汗で全身が光っている。前掛けの下も、汗で湿っていた。男の目が上から下へと移動する。その視線だけで肌が粟立つ。

前回と同じだ。この男に見られると、身体が勝手に反応する。

「今日は前のお返しだ。あんた、前は自分でイかなかっただろ。あれ、ずっと気になってた」

黙れ。あれは俺の最後の砦だった。果てることを拒否した。それだけが勝利だった。

男の手が胸に触れた。汗で濡れた肌の上を、掌が這うように滑る。鍛冶で硬くなった胸の筋肉を握るように揉まれ、親指が乳首を擦り上げた。

「ん――」

声を噛み殺した。

前回、この手の温度が脳に焼きついている。忘れたかった。忘れられなかった。

男がもう片方の手で俺の汗を掬い取り、それを乳首に塗り込んだ。自分の汗で自分の身体が敏感にされていく屈辱。

「あんたの汗、椿油みてえな匂いがすんな。染みついてんだろ、この匂い」

――鍛冶場の隅に、刀の土置きに使う粘土がある。

男がそれを手に取った。灰色の粘土を手のひらで練り、俺の胸に塗り始めた。

「何を――」

「刀みてえに焼き入れしてやる」

冷たい。粘土が肌に触れた瞬間、全身に鳥肌が立った。

男の手が胸から腹へと粘土を塗り広げていく。手のひら全体で押しつけるように、肌に密着させていく。指の腹が肌をこするたびに、粘土の中の砂粒が微かな摩擦を起こす。

乳首の上にも塗り込められた。突起が粘土の層の下で圧迫され、押しつぶされる感覚。指で直接潰されるのとは違う。全面からじわじわと圧迫される、逃げ場のない刺激。

腹、臍の周り、下腹部。丁寧に塗り込められていく。太ももの内側にも。股の付け根にも。粘土の冷たさが肌の熱を奪い、その温度差で身体が震えた。

粘土が乾き始めている。最初に塗られた胸の部分が硬くなり、肌の動きを拘束し始めた。呼吸で胸が膨らむたびに、乾いた粘土がびきびきと引っ張られる。

「鍛冶の道具を――こんなことに使うな」

「あんたの身体は鋼だろ。なら鍛冶の工程で扱うのが筋だ」

屁理屈だ。

だが反論する前に、男が炉の横から桶を取り上げた。炉の上に置いてあった桶――湯が張ってある。鋼を焼き入れする前に温めておく、あの桶だ。

湯を、頭からかけられた。

「――ッ！」

温かい。炉の余熱で温められた湯が、粘土の上から全身を流れ落ちる。粘土が湯に溶けて肌に密着し、皮膚の表面温度が一気に上がった。毛穴が開く。全身が緩む。

次の瞬間。

焼き入れ用の冷水桶を掴み上げていた。冷水をぶちまけられた。

「あッ――！」

声が出た。

反射だ。温められた全身に冷水が叩きつけられ、筋肉が一斉に痙攣した。粘土がひび割れて、胸や腹から破片が剥がれ落ちていく。その下から、鳥肌の立った裸の肌が露出する。

乳首が、粘土から解放された瞬間に硬く尖った。圧迫から解放された反動と冷水の刺激が重なり、胸だけで快感の塊が弾けた。

「鳴ったな。いい音だ」

男が嗤っている。

鍛冶の焼き入れだ。赤熱した鋼を水に入れて急冷する。その工程を、俺の身体で再現している。

職人の技法を、こんなことに。この男は、俺の鍛冶を冒瀆している。

粘土の残骸がまだ腹にこびりついている。その下で――勃っている。

温度差の衝撃で全身が過敏になっている。冷水で収縮した皮膚の中で、そこだけが逆に充血して膨れ上がっている。粘土の層を内側から押し上げるように反り返り、先端が腹の粘土を突き破ろうとしている。

「隠せてねえぞ、師匠」

男の手が腹に残った粘土を剥がしていく。ベリ、ベリと。肌と粘土の間に入り込んだ汗が、剥がすたびにぬるりと光る。下腹部の粘土を剥がした瞬間、限界まで張り詰めた勃起が跳ねるように露出した。先端から先走りの液が溢れ出し、腹に糸を引いている。

「人間国宝様がこんなもんで立ってやがる。温度で鳴かせただけで、こうなるのか」

男の指が勃起に触れた。冷水で冷えた竿を、温かい掌が包み込む。温度差で、また全身が跳ねた。握り締め、根元から先端まで一度だけしごき上げられる。先走りの液が男の指に絡み、ぬちゅ、と音がした。

「ぐ――」

歯を食いしばった。

温度だ。温度差で身体が反応しただけだ。この男のせいではない。鋼だって同じだ。急冷すれば結晶構造が変わる。人間の身体も同じだ。

だが男は竿から手を離した。まだ足りない、と言いたげな目をしている。

「本番はここからだ」

男が椿油の瓶を開けた。

また、あの匂い。

油を塗った指が、尻の割れ目に沿って滑り降りた。藁縄で縛られた両手では抵抗できない。足を閉じようとしたが、男のひざが割って入った。

「前は指二本で鳴いただろ。今日は最初から三本だ」

「――勝手に決めるな」

「身体に聞いてやるよ」

一本目が入った。前回の記憶がある。身体が覚えていた。括約筋の抵抗が、前回より一弱い。油で滑る指が、するりと第二関節まで沈んだ。前回は痛みで硬直した。今回は、内壁が指を迎え入れるように開いた。

認めたくない。身体が、あの時の快感を記憶している。

二本目。内壁が指を締め付ける。だが拒絶ではない。確認するように、指の太さを測るように。二本の指が中で開かれ、内壁を押し広げられる。きゅう、と締まっては緩む。自分の意思とは関係なく、身体が学習している。

三本目。押し広げられた。限界に近い張りの中を、指がゆっくり奥へ進む。痛みの奥の、あの場所を探り当てられる。指の腹が前立腺を押し込み、ぐりぐりと円を描くように回された。

「ッ、んー」

声ではない。息だ。息の延長だ。

だが前回より確実に長い。前回は喉の奥で止められた。今回は、唇の間から漏れ出ている。

男が三本の指を曲げたまま、ゆっくりと抜き差しを始めた。前立腺をかすめるたびに、勃起した竿がびくりと跳ねる。先走りの液が途切れなく溢れ、腹の上に溜まっていく。触れてもいないのに、竿全体が脈打っている。

「このまま指だけでイけそうだな、あんた」

「――黙れ」

「まあ、それは次の楽しみにしとくか」

指が抜かれた。代わりに、太い熱が押し当てられた。

「入れるぞ」

「……」

拒否の言葉が、出なかった。

前回は「拒否する」と言えた。今回は言えなかった。

言えなかった自分に、吐き気がする。

先端が押し入ってきた。ずぶ、と。三本の指で広げられた後でも、太さが違う。内壁が軋みを上げるように締め付けた。

粘土のかけらが散った肌の上を、男の腹筋が擦る。冷水で冷えた肌と男の体温の差が、接触するすべての面で燃えるような感覚を生む。

じわじわと奥へ。前回は一気に押し込まれた。今回は違う。男が意図的に遅くしている。中に入っていく感覚を、一瞬一瞬味わわせるように。

根元まで。

「ぐ、あ——」

声が出た。前回より、大きい。

藁縄が手首に食い込んだ。手首の上で藁が捻じれ、汗で湿った肌にざらざらと擦れる。逃れようとしたのか、しがみつこうとしたのか、自分でもわからない。

男が動き始めた。引いて、押す。引いて、押す。鍛冶のリズムだ。鞆のリズムで腰を動かしている。

わざとだ。俺の呼吸のリズムに合わせている。吸う時に引き、吐く時に押し込む。身体が自然に受け入れてしまうリズム。

鍛冶のリズムは、俺の身体に染みついている。三十年分の呼吸の癖を、この男が利用している。

ぐぶ、ぐぶ、と椿油の水音。ぱん、と腰がぶつかる音。二つの音が鍛冶場に反響する。槌で鋼を打つ音の代わりに。

前立腺に当たるたびに、視界が明滅した。引くときにかすめ、押し込むときに圧迫する。二段階の刺激が途切れなく続く。

「声、前より出てるぜ」

出ている。わかっている。前は声を殺せた。今回は——

呼吸のリズムを合わせられているせいだ。吐く息と一緒に声が漏れる。身体が受け入れるリズムで突かれると、抵抗する余地がない。

男の手が勃起を握り込んだ。藁縄で縛られた手では払えない。内側から突かれながら、外側を握られる。上下から挟み撃ちにされている。快楽が逃げ場を失って下腹部に凝縮していく。

「やめ——」

「やめねえよ。今日ではてめえが先にいくまでやる」

速度が上がった。鞆のリズムが崩れ、もっと速く、もっと荒い拍子になる。腰の動きと手の動きが同期している。突くたびに握り上げる。引くたびに亀頭を掌でこねる。

先走りの液で男の掌がぬるぬると光り、ぐちゅぐちゅと音を立てている。中からも外からも、水音が止まらない。

二重の刺激が、脳の回路を焼き切っていく。抵抗する思考が溶けていく。

睾丸が引き上がった。下腹部に熱い塊が凝縮していく。限界が近い。全身が硬直し始めている。つま先が曲がる。背中が反る。

「あ、あ、ツ——」

——嫌だ。この男の前で果てるのは。

だが身体は言うことを聞かない。男の腰の一突きが前立腺を正確に捉え、同時に掌が亀頭を包み込んで捻った。その瞬間、下腹部の熱が弾けた。

声にならない叫びが喉から漏れた。

精液が腹の上に飛び散った。一度、二度、三度。脈打つたびに白い線が肌の上に弧を描く。粘土のかけらと混ざって、灰色と白の模様が腹に広がった。四度目。五度目。まだ止まらない。男の手がしごき続け、最後の一滴まで搾り出されていく。

射精の痙攣が収まらないうちに、男がさらに深く突き入れた。絶頂直後の内壁が過敏に締め付け、男のうめき声が頭上で鳴った。

「くそ——締めすぎだ——」

男が奥で果てた。中に注ぎ込まれる熱。前回と同じ。だが今回は、俺も果てた後だ。全身の力が抜けた状態で、中に満たされていく感覚だけが、やけに鮮明だった。男の射精の脈動が内壁を通じて伝わってくる。どくん、どくん、と。

男が抜いた。白濁が溢れ出す。太ももを伝い、床に落ちる。ぼた、ぼた、と。

腹の上には自分の精液と粘土のかけらが混ざっている。鍛冶場の床が、椿油と粘土と体液で汚れている。俺の聖域が。

前回は——果てなかった。勃起したまま男を睨んだ。

今回は、果てた。果てさせられた。男の手の中で、男のリズムで。

敗北だ。

藁縄を自分で解いた。歯で結び目を噛み、引き裂いた。

手首に赤い痕が残っている。これは二、三日消えない。

男は床に座ったまま、こちらを見ていた。

裸足のまま歩いて、男の脇腹を蹴った。本気で。

「ぐッ——」

「出る」

男が咳き込みながら立ち上がった。鍛冶場の出口に向かう。

敷居をまたぐ寸前に、俺の口が動いた。

「明日も炭を運べ」

男が足を止めた。

振り返ろうとした。

「振り返るな。行け」

男が出ていった。

一人になった鍛冶場で、藁縄の残骸を見つめた。

なぜこんな言葉が出た。

殺すと言った。出ると蹴った。なのに「明日も来い」と言った。

――炭運びの人手が足りなかっただけだ。

そう思おうとした。

思えなかった。

鍛冶場の床に落ちた粘土のかけらを、箒で掃いた。

あの男の声が頭の中で反響している。少年院で見た写真の話。あの刀は俺に向かって光ってた。

鉄滓だ。

あの男は鉄滓だ。鋼を打つ時に飛び散る不純物。

不純物は叩き出す。それが鍛冶だ。

――なのに、なぜ。

呼吸が、まだ鞆のリズムから戻らない。

研ぎ場に戻った鋼造は、砥石に水を張りながら呟いた。

「……ほう」

戸の隙間から見えた湊の横顔。あれは三十年前、祖父の下で修行していた頃の湊と同じ顔だった

。

誰かに怒っている時の、あの顔。

ただ、あの頃と違うのは――怒りの中に、別の色が混ざっていることだった。

鋼造は指先を擦り合わせ、砥石の目を確かめた。

人の本質は、磨けば見える。

あの若造が何者かは、もう少し見なければわからない。だが、あの目は――悪くない。